

外科医・有森冴子に憧れた欲張り女医



東京女子医科大学八千代医療センター 乳腺・内分泌外科

地曳 典恵

2001年3月、私は東京女子医科大学を卒業し、東京女子医科大学第2外科に入学した。第2外科は（通称）一般外科と呼ばれ、消化器外科、乳腺外科、小児外科の診療を行っていた。なんでも診られる医者になりたい、診断から治療、畳の上で亡くなるまで、患者さんに付き合える医者になりたいと思ったことが外科を選んだ理由だった。今やほんとに畳の上で亡くなる人はいなくなったが、私の曾祖父母は近所の先生のお世話になって二人とも家の畳の上で亡くなった。それが私の人の死に初めて立ち会った経験だったから、この言葉を使わせていただく。

私は現在、東京女子医科大学八千代医療センターで乳腺外科医として勤務している。自ら強い思いで選んだわけではなく、いつの間にか、求められるままに乳腺外科を専門としていたのが正直なところである。研修医のときは、食べることができなかった患者が食べることができるようになる消化器外科手術に興味があった。乳腺外科の手術はバリエーションが多いとは言えず、外科医としての花形とは思えない。しかし、今となると診断から治療、最期まで患者さんと付き合い続けた私にはぴったりな科だったと思う。診断はマンモグラフィー（MMG）、エコー検査を自ら行う。乳癌の疑いがあった場合はエコー下もしくはMMG下に生検を行うこともある。乳癌は女性の11人に1人が罹ると言われるほど増加傾向にあり、女性の罹患率一位の癌である。早期発見し治療を行うことで5年生存率は90%を超え、治療が期待できる癌でもある。新しい薬剤が年に数種類登場するほど、薬物治療の進歩は目まぐるしく、進行再発乳癌においても長期に生存できるようになった。治療が長期になるため、緩和治療まで自らが行うことも少なくない。乳癌は治療しがいのある癌とも思える。なんでも診られる医者になりたかった私は、乳腺外科を選んで、診断から手術治療、化学療法、緩和治療まで患者さんに提供することができている今に満足している。さらに、院内の緩和ケア室長を兼務、週1回は同じ八千代市内にある向日葵クリニックで訪問診療を行っている。終末期となり在宅療養が必要になった患者さんの訪問診療を継続して行うこともある。若い時に「先生、なんでもやりたいというのは欲張りだよ。」と言われたことがある。そういうものかな、いやそんなことはないはずだと、ちょっと悔しかったのを覚えている。確かに一人の患者さんの最初から最期まで付き合うことはできないかもしれない。しかし、私がある患者の最期に立ち会うことになったとき、その患者が病気と戦っていた時のことをわかる医者になりたいと思っている。患者も自分が治療をがんばってきた歴史をわかってほしいのではないかと思う。だから、今は外科医としていられるまで癌治療に積極的に向き合っていきたいと思っている。

最後に、私が医師を志したきっかけは三田佳子さん主演のドラマ「外科医・有森冴子」だった。第1

話のラストシーンで、胃癌で亡くなる元夫の心臓マッサージを必死で行う姿に身体が熱くなったのを覚えている。今の時代、がんで死んでいく人に蘇生を行うなんてナンセンスだが、時代がそうだったのだろう。中学生だった私は人が死んでいくときにこんなに必死になれる職業に感動した。とはいえ、有森冴子に憧れて外科医になりたいと思っていたわけではない。なんでも診られる医者になりたいと思っていた私は、心臓は人間の中心であり、心臓が診られればなんでも診られるなんて勘違いして循環器内科を志したこともあったが、病院実習で何かが違うことに気が付いた。結果、有森冴子と同じ外科医の道を選んでいて。さて、第3話は私が専門としている乳癌がテーマで、結婚前の若い女性が乳癌になって、手術前日に婚約者のもとへ病院を抜け出してしまふ。病院はもちろん大騒ぎだが、翌朝戻ってきた彼女を有森冴子はあたたかく迎える。有森冴子は患者ひとりひとりに真剣で、とにかくかっこよかった。今見返しても医療現場の問題、人間模様をリアルに描いていて古さを感じさせないドラマだった。今でも私の心のバイブルとなっている。私もおそらく有森冴子先生と同じくらいの歳になったように思う。有森冴子の台詞で「自分があと20年外科医を続ける間に手掛けられる患者は千人に満たない。一人一人と大切に向き合うことが務め」という言葉がある。私が外科医でいられる時間はあとどれくらいあるのかわからない、この言葉を心に刻み、これからも外科医として頑張っていこうと心新たにした。